

なみくくの人のす、はく體こそいとおもしろけれ、おのく門さしこめて、奥のひと間を屏風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて、嬭が帷子の上張、爪さき見えたる足袋もいとさむく、冬の日かげのはやく晝になりゆき、庭の隅調度どもとりちらしたる中に、持佛のうしろむきたるぞめには立なれ、家の童の椽のやぶれすのこの下をのぞきまはるは、なにをひろふにやとあやし、味噌とよばる大男の袋かぶり、箕きたるもめづらかに、米櫃のサンうちつけ、俎しらげ、行燈はりかへて、たつくり鱧、あさづけのかほり花やかに、かみしもの膳するならべたるに、ほどなく暮て、高いびきとはなりぬ、

〔一話一言〕南郭掃塵會 南郭先生毎年十二月十三日には、家内の煤拂をさけて、東海寺少林院にて詩會をなす、名づけて掃塵會といへりと、耆山和尚の物語なり、

〔鈴がね艸子〕寶曆十二年十月廿七日、晴天煤拂也、是去八月母人除服之掃除、當月又予除服相兼掃除也、十四年七月七日、晴天煤拂、閏十二月八日、曇午後晴天煤拂、

古札納

〔俳諧歳時記 十二月〕札納祈禱の札を、煤はく日に納るなり、

〔塵塚談下〕古札おさめといふ非人、予小川 若年の頃は、毎年十二月に、武家町家を御祓おさめよ、古札納とさけび歩行ける、年中佛神の札守の溜りしを、錢を付て右の非人にやりし事なり、近歲絶て來らず、

〔東都歳事記 十二月〕十三日 煤拂 享保の頃までは、古札納といふ非人、毎年十二月に、武家町家を御はらひをさめ、古札納とさけび歩行けり、○中 この事、總鹿子、江戸砂子拾遺等にもいへり、今はなし、

餅搗

〔日次紀事 十二月〕此月尾、傭夫無晝夜、肩木槌巡街衢、高聲呼餅搗、倭俗舂米并餅謂、加都貧民雇之以使舂餅、日間無暇者、又嫌乞人之請餅者、多入夜舂之、此月尾、良賤每家舂餅、作圓鏡形、或作菱葩形、